

---

# 射殺漫才

三代渡吉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

射殺漫才

### 【Zコード】

N8113D

### 【作者名】

三代渡吉

### 【あらすじ】

どれもこれも見飽きたタイプのネタばかり！ そう言われて追い詰められたお笑いコンビが繰り出す切り札とは……。

あまりウケのよくないお笑いコンビがいた。

彼等のネタは、どれもこれも一番煎じだと言われ、軽くあしらわれてしまうことばかりだったからだ。

ギャグも全てが使い古された語感のものばかり。一人はおかげで「使用済みのお茶つ葉」という、不名誉なあだ名がつけられるようになるほどだった。

そうなつてから、二人は初めて悔しいという感情を覚え、怒りを沸き立たせた。

ある日、ボケの坂橋さかはしが、ツッコミの綱片つながたに、鼻の穴をでかくしながらこう言った。

「ネットで好き放題叩いてる奴等に一泡吹かせてやろつぜー。」

綱片は、すぐに胸を張つて同意した。

「ああ、あのアホヅラさげてヘラヘラ笑つてる連中を、笑い殺しにしたる！」

「じゃあ、あのネタやるか？」

「それがいい。もうこうなれば切り札を出すしか俺達に道はないんだ」

「だったら話は早いな、いくぞ？」

そう言つて坂橋は、平凡な金庫にがつしりと手をかけた。

綱片は、言つまでもないとばかりにしつかりと頷き、二人は深い決意を固めたようだつた。

もはや迷いなどあるものかと、坂橋は勢い良く金庫を開け放つた。

翌日、若手の漫才舞台に一人は出演した。

実を言えば彼等は、若手と言われるよつた芸歴ではない。かれこれ一年は頑張ってきた。

しかしそれでも、一年という経験から、ギリギリ若手といつ位置に事務所が彼等を滑り込ませてきたのだ。

チャンスといえばチャンスだが、彼等自身にとつては、屈辱このうえなかつた。

楽屋や舞台袖でオロオロしてゐる奴や、ちょっと人気が出たからつて鼻高々になつてゐる若手と一緒にされる悔しさは、一言では表せないものがあつた。

こうなれば、今回の回にかけて、自分達の名を一気にあげるしかない。

二人は拳をぶつけあつて、今回の成功を祈りながら、出番を待つていたが、間もなくして二人のコンビ名“バツキユーンズ”がステージ上で呼ばれ、二人は舞台にあがつた。

「どうも、バツキユーンズです」

客の反応はイマイチだつたが、坂橋は挫けなかつた。

「最近寒いですねー」

「そつか？ もう春やないか」

「何言つてるんですか、うちらのサイフは常時真冬ですよ。誰かさんせいでのせいで

「誰かさんつて誰や」

「じーつ」

坂橋は、とても恨めしそうに客の方を見た。

「つて、何客のせいにしとるんじや、このヴォケ！」

と、綱片は、手の甲を坂橋の胸板にパシーンと叩きつけた。典型的な突つ込みの仕方である。

しかし、彼等の漫才の突つ込みはそれだけでは終わらなかつた。なんと突つ込んだ綱片の服の袖から、隠し拳銃が飛び出して、突つ込みと同時にバーンと弾が放たれたのである。

放たれた弾丸は、坂橋の服の表面を焼ききつて、心配そうに舞台袖でステージを見ていたプロデューサーの顔面を貫いた。

血がピューッと飛び出してきて、バキューンズはわざとらしく「

「うわー」つと驚いた。

この微妙さ加減が客にウケたのか、客席は少し笑いに包まれた。

今だ、とばかりに一人は置み掛けていく。

「ほれ、お前が失礼なこと抜かすから、プロデューサー顔面撃たれて死んでもうたわ」

「なんこと言つても、生きるためにプライドも礼儀も捨てなくちや、また明日も『』漁りだよ」

「つてそんなことしてたんかい！」

パシーン、と平手打ちをすると、また袖から隠し拳銃が飛び出した。

今度の銃弾の矛先は、最近ピンとして売れている噴火山男という、ハジけた芸をする若手の心臓だった。

ドピューッと勢いよく飛び出す血の噴水のシユールをに、客席はどんどん沸いてきた。

「おいおい、後輩撃ち殺すなよ」

「お前がアホやからやろ！」

今度は相方の脳天にチョップした。すると、またバーンと弾が出了た。

放された銃弾は、客席で少し気取ったようにポップコーンを食べていた、ちょっとオデブ気味なお笑いオタクの頭に直撃した。

氣取った笑いのままバタッと倒れて、また血がピューッと飛び出した。少し客席は静まり返つたが、ピューッという音のシユールさんに、すぐ笑いは戻つた。

調子にのつた彼等は、ついには客席をもつとネタにすることにした。

「にしても皆さん、すごい笑つてますけど、残酷な方々ですねえ」

「いい加減に客に当たるのやめんか」

「だつて、私もこうして持つてますけどね、これ全部実弾ですよえつ、という声が客席で一斉にハモつた。

それを聞いて、二人のエッと舞台袖にいた人間達のエッともハモつ

た。

少し沈黙したかと思うと、密は歎声ではなくて悲鳴をあげて、蜘蛛の子を散らすように逃げ惑つていった。

舞台袖にいた人間も、気づいたら全員そこから消えていた。舞台の空間に残つたのは、バキューンズと死体だけになつた。シーンと静まり返つてしまつた舞台の上で、二人は畠然としていたが、すぐに喧騒は戻つてきた、警察がやつてきたのである。

「動くな！」

やつてきた警官は、顔を真つ赤にしていた。

もしかしてこの警官の知り合いを殺してしまつて怒つているのかと、二人は怖くて思わず抱き合つた。

警官は、怒つたままに銃をうえに向けて、辺り構わず撃ちまくつた。

そして一言、爆弾のような大声で、怒鳴るようにして、一人にこう叫び散らした。

「そのネタはなあ！ 僕が警官になる五年前に考えたネタなんだよおつ！」

二人は警官の一言に、これもパクリだつたかとガックリして頃垂れた。

一方、怒り狂つていた警官は、乱射していた銃の弾の一つが、上の照明器具に当たつたらしく、それがひゅーっと落ちてきて、怒つた顔のまま押しつぶされて死んだ。

すると、それを見た二人は、一転して今度は手を取り合つて喜んで叫んだ。

「やつたやつた！」

「これで俺達が本物やー！」

こうして喜んでいた一人だったが、まさか射殺漫才という新たなジャンルを切り開いた一人が、後に死刑囚として裁かれて、獄中で

死刑漫才を考案して伝説になるとは。

このときせ、きっと夢にも思わなかつたでしょ?.....。

(後書き)

「ばんライス先生の射殺シリーズを書いてみました。リストペクトおぶゴハンらしい。

射殺シリーズ的には毒が足りない気もしますが、『ばんライス作風』をより真似てみると執着してみたので、その辺りは割愛してください。オチが意味不明すぎたかな、というのが反省点。次はもっと過激にやってみようか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8113d/>

---

射殺漫才

2010年10月8日15時31分発行